ムッゴロウの結婚記

畑正憲

文藝春秋

著者略歴

昭和10年福岡市に生まれる。昭和33年東京大学理学部卒業。同大学院で運動生理学を専攻。昭和36年学研映画に入社、43年まで動物記録映画製作に従事。その後動物作家として独立、「われら動物みな兄弟」で第16回日本エッセイストクラブ賞を受賞。他に著書「ムツゴロウの青春記」「ムツゴロウの博物志」「ムツゴロウの無人島記」「天然記念物の動物たち」「生きる」など。

ムツゴロウの結婚記

昭和四十七年三月五日第一刷

定価　五〇〇円

著者　畑（はた）　正憲（まさのり）

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地

電話　東京（二六五）一二一一

郵便番号一〇二

印刷所　凸版印刷

製本所　加藤製本

＊万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

©1972 Masanori Hata　Printed in Japan

0095-332170-7384

目次

遠く離れて　五
私の大学　三一
三人の純子　五五
二人だけの夜　八一
一緒に住もう　一〇七
三畳半と五畳半　一三三
同棲をめぐって　一六一
私の結婚式　一八七
これが女房　二一一
あとがき　二三三

裝幀　長　新太

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ムツゴロウの結婚記

遠く離れて

東京と九州。千二百キロ。

その距離をものともせず、ひんぱんに手紙が往復した。もっとも、切手をはって投函しさえすれば後は他人が運んでくれるのだからいくら離れていても構わないわけだった。でも、若い恋人たちにとってはもどかしく切ない遠さだった。

いくら思いのたけをぶちまけても、髪の匂いや唇の震え、心のときめきを運ぶわけにはいかなかった。と同時に、二人がとびこんだ世界はあまりにも違い過ぎた。

純子が卒業してすぐ勤めたのは、市が設立した工芸指導所だった。それは彼女の家の斜め前にあり、国画会の宇治山哲平氏、日本の民芸品を愛するバーナード・リーチ氏を顧問と仰ぐ立

派なものだった。

リーチ氏の目をひきつけ、しばらく滞在させる原因になったのは、日田の山奥で営々と守り伝えられた小鹿田(おんだ)焼だった。

その頃、小鹿田の部落は十軒もあったろうか。山間にちんまりと家がかたまり、ひねもす紫色の煙を上げて武骨な日用品をつくっていた。味噌を貯えるカメ、どんぶり、でこぼこだらけの皿、老人向きの便器。有名になる前の小鹿田焼には、ひねこびた形をした頑丈一点張りのものが多かった。それが今では釉薬(うわぐすり)の色合いこそ変わってはいないけれど、変にスマートになり、製品の数が驚異的に増えている。観光や旅行ブーム、民芸ブームのせいだろうが、これを世に出す仕事に手をつけたのが、私たちが高等学校を卒業した年に出来た工芸指導所だった。

他に、名産の杉を使った工芸品、竹細工、漆器なども手掛けられていた。頭にすぐれた指導者を得たのが幸いして、そのいずれもが最初から垢抜けしていた。いわゆる観光土産用の安っぽい細工に終らず、かなりの産業として定着したのは、すぐれた芸術家を迎えて本格的に取組んだせいだろう。純子はそこで事務員兼小使い、製作の助手、つまり半端仕事を一手に引受ける損な存在であった。

一方私は一応大学生であり、日本の文明の中心地で目まぐるしい毎日を送っていた。

当然、生活が違ってくるし、それでも近くにいればそれほどでもなかったろうが、二人をへだてている距離が、恋心に微妙なかげりを与え、目に見えぬ無数の小さな亀裂を生じさせていた。恥を忍んで当時の手紙を再録してみよう。

……東京は曇りの日が続いています。現代叢書の『ロシヤの森』『羅針盤のない旅行者』、夢中でした。前者は、社会主義レアリズムには珍しい圧倒的な自然描写、後者は、日本人の体質にない軽やかさが魅力です。アラゴンの『芸術論』どうでしたか。

……現代叢書、日田の図書館にはまだ入っていませんでした。とてもがっかり。アラゴンの本はまだ写真を見ただけ。あなたがたくさん本をお読みになるので、負けまいと思ってもやっぱり駄目。何日もかかってやっと宮本百合子の『播州平野』を片付けました。『伸子』だとか『道標』だとか、宿題を前にして目を赤くしています。買えたらいいのですけど、二千円ぽっちのお給料じゃ何もできません。それも丸々使えればいいのですが、ご存知の家庭事情、五百円を残して全部母に渡してしまいます。封切りの映画を二回見たらアジャバーです。あなたは労働者として自覚し団結せよと仰言いますが、わたしの周りにいるのは自称芸

術家ばかりで、真に労働者らしいのはわたし一人だけです。ストライキなんて敵には痛くもかゆくもないでしょう。

ところで、何を召し上がっていますか。待ち遠しい夏休みにガイコツが現われるのじゃないかと心配です。

……アラゴンの主張にはおかしい所があります。革命とそれに関係した英雄たちを讃美するのは結構。しかし、芸術は英雄だけを描くものではないでしょう。オストロフスキー、レオーノフ。十分に感動的な作品を書いてはいますが、たとえばわが子の初めての誕生を迎えた庶民のよろこびは詩にならないものでしょうか。その中にも階級性を発見しなければならぬのなら、再考の要があります。社会主義レアリズムは新しい。ピカピカの新品。日本には根づいていないものです。僕は今しばらくこの周辺を掘ってみます。

本日、近代美術館でピカソのゲルニカという映画を見ました。僕はわけのわからぬ近代絵画をケイベツしてきましたが、ゲルニカを見て胸をつかれました。何かがあります。ピカソは偉大です。

ゴッホ、ゴーガン。古くはブリューゲル。僕は文学的に絵を見ていたようです。絵にはもっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と違った、絵にしか通用しない芯があると反省しました。でも、そうは言っても、ピカソでは青の時代が好きです。機会があったら、画集で有名な『老婆』を捜して下さい。老醜をこれほど見事に定着したものはないし、それは逆の意味で、確かな人間愛でもあるのです。

……今日はショックでした。雨もよいのじめじめしたお天気なので、指導所の二階にあるアトリエで、Sさんが油絵を描くところをぼんやり見ていました。

ご存知ないかもしれませんが、Sさんは日田高の二級先輩で、とても絵が上手な人です。ここでは一応デザインの係になっていますが、宇治山先生が特に許可されたとかで、アトリエで自分の仕事をしています。デザインの方は閑を見てやる位で、まるで学生アルバイトみたいです。

そのSさんがいきなり抱きついてきて、接吻しようとしたのです。何か言っていたようですが、わたしは夢中で馬鹿力を出し、気がついた時にはSさんを突きとばしていました。

「このヤロー。わたしが好きなのは……」

と、あなたの名前を口にしかけましたが、何故かはばかられました。Sさんは上野の美大に合格したのに、家が貧乏で、とうとう日田で働くことになった人です。

それでも同情なんかしている場合じゃありません。カンバスを乗せる台の脚をつかんでコツンと叩いてやりました。

するとどうでしょう。タンコブに手をやって大声で泣きわめくじゃありませんか。今日は他の職員が揃って小鹿田へ行ったのを彼は計算していたに違いありません。

「純ちゃん、すまん。誰にも言わないでくれよな、頼む。でないと、みんなが飢えることになるから」

ですって。それでまたワアワアです。みじめったらしくて、殴った棒を放り出して帰ってきました。男の人って、すぐさまけものじみる割には、世間体とか名誉とかにこだわる感じですね。

雨の日田には黒い瓦屋根が続いています。二階の自分の部屋からこうして古い町並みを眺めていますと、ビルにはさまれているあなたのことが想われ、本当に遠くへ去っていかれたようで涙があふれてきました。あなたはすごい学者になろうとしているのに、わたしは絵かきの卵の頭をコツンです。やりきれない暗い日です。どうかこの手紙にはすぐさま返事を下さい。そして、絵や文学の話はこの次にして、何を食べ、お洗濯はどうなさっているのか、くわしく教えて下さい。

……災難でした。この世で一番だらしがないのは、芸術家を気取っている中途半端なバカモノです。家庭の事情など考慮してやる必要はないと思います。公表してとっちめるべきです。

さて食事の件ですが、ほとんど寮の大食堂ですませます。朝はミソ汁に納豆、生卵をつけることもあります。昼はラーメンをおかずにしてご飯。腹が空いていない日には、カレーライスかハヤシライスです。夜はシチューだとか焼魚とか、日田にいる頃と大差ありません。

その手順を述べるなら、とっつきのカウンターでセルロイドの食券を買います。食券はご飯が白、納豆が黄というように色分けされていて、緑のミソ汁が三円です。

それからアルミの盆を左手に持ち、セルフサービスです。アメリカの現代小説に出てくるカフェテリアみたいなものです。もっとも栄養とうまさの点では、わが駒場寮の方がずっと悪いでしょうが。

納豆を食べたことがありますか。

日田ではあまり見かけなかったので、ここで食べたのが初めてでした。最初どうやって食べたらいいのかわからず、人の手元をじっと見ていました。すると、洋辛子をたっぷり入れ、ネギの細切りを混ぜ、お箸で十分にねるのでした。と、豆と豆がねばを引くようになり、そこへ

醤油を注ぎまたねってご飯にかけて食べるのです。はじめ何だか粉っぽい感じがしましたが、慣れると毎朝欲しくなります。その日の気分によって、生卵を落としてもいけます。

納豆を知らないのは、僕だけではありません。今でも、辛子や醤油抜きで、豆を一粒ずつ口に運んでいる男がいます。そういう男は寒々とした食堂の端っこにポツンと一人で座り、おごそかな態度で飯を食っています。孤独が好きなのでしょうが、皺くちゃの豆を噛む時、片方の眉をピリピリさせたりしています。

夜食は裏門を出たとっつきにある一膳飯屋が大繁盛。ここのおやじは、共産党が大好きで、学生運動の応援団長でもあります。テーブルで学生運動の批判をしようものなら、出て失せろと叱られます。

そしてこうです。

「なんでえ、資本家のブタ野郎の味方すんのか。てめえもドメクラだあな。そういうのをプチブルと言うのよ。帝国主義の手先として使われているのがわかんねえのか。マルクスさん、レーニンさん、毛沢東さん……」

革命家の名前を口にする時、おやじは不動の姿勢をとります。きっと、軍隊生活が長かったに違いありません。その昔、われわれでさえ、

「天皇陛下が……」

と言う時には、姿勢を改めさせられたではありませんか。

おやじは続けます。

「てめえも大学生なら、エンゲルスさんの本ぐらい読みやがれ。誰のお蔭で勉強出来てると思ってんだい。国立の大学てえのは、われわれの血税で運営されてんのだぞ。……え、わかったか石頭。そりゃ、おいらは無学だ。資本論なんて読めやしねえ。でもよゥ、階級的直感てえものがあらあ。ええか青二才、おいらはダテに庖丁をといでいるのではないぞ。武装ホーキの日がきたら、こいつで大衆の血を吸う豚どものどてっ腹をブスリだァ」

「いいぞ、おやじ」

「千両役者！」

「ラーメンもう一杯」

こんな調子です。でも彼の庖丁が活躍する日はこないと信じています。電気掃除機が普及し、ホーキなんて流行らなくなるでしょうから。

他に、安い所といえば、渋谷の駅前に外食券食堂が一軒だけ残っています。ここは寮食なみの安さで美味さバツグンですが、先輩がこう教えてくれました。

「あそこの主人は三国人で、終戦からずっと三軒茶屋の辺りで豚を飼っとった。食堂、闇市、デパートなどの残飯を貰って、豚で儲けたそうだ。ところが東京に人が増えたら、近所から苦情が出て豚が飼えなくなった。そこで始めたのが食堂さ。近くの大食堂全部と特別契約を結び、残りものをそっくり仕入れるのさ。豚がダメなら人に食わせるというのがあそこの商法さ」

「まさか……」

「疑うのなら、エビフライを注文して衣をはいでみろ。中身が必ず分離しているから。つまり、食い残しを適当につぎはぎして、どうにか格好をつけて売っているのさ」

これは真実くさい気がします。鼻をつまんで探索の結果、注文したエビは四つの部分から成り、明らかに合成品でしたから。

渋谷から大学へ向かう道の左側に、鯨料理専門のいい店が出来ました。Cランチが八十円。それでもカツと刺身つきです。

月のはじめ、お金に余裕がある時には、恋文横丁のタンメン、ビビンバ。百軒店のカレーライス専門店のムルギーカレー、サモワールというロシヤ料理の店でボルシチと黒パンとしゃれます。

ボルシチと言えば、思い出すのはゴーゴリの『ナブゴロード夜話』です。初期の連作ですが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com